

大学生用援助要請意図尺度の作成の試み

中岡 千幸¹⁾, 児玉 憲一¹⁾

Development and Validation of the College Students' Intention of Seeking Counseling Inventory

Chiuyuki NAKAOKA¹⁾, Kenichi KODAMA¹⁾

The psychological barriers that hinder college students to undergo student counseling are called service gap. To clarify the factors affecting help-seeking behavior among college students, we need a reliable and valid instrument to measure college students' intention of seeking counseling. The purpose of this study was to develop Intention of Seeking Counseling Inventory for College Students, and examined its reliability and validity. The Inventory was developed, based on Cash, Begley, McCown, and Weise's Intention of Seeking Counseling Inventory (1975). Factor analysis suggested three-factor solution and sufficient internal consistency. The first subscale, Psychological and Interpersonal Concerns, included 10 items ($\alpha = .92$). The second subscale, Academic Concerns, contained 4 items ($\alpha = .84$). The third subscale, Health Concerns had 3 items ($\alpha = .78$). Examination of the validity of the Inventory confirmed that it had comparatively high validity. Finally, implications for future research were discussed.

Key words: service gap, student counseling, help-seeking behavior, intention of seeking counseling

I. 問題と目的

内田¹⁾は、「大学における休・退学、留年学生及び死亡学生に関する調査」において平成17年度の国立大学83校中74校の休・退学、留年学生の現状と動向について明らかにしている。この調査によると、うつ状態やステューデントアパシー状態などメンタルヘルス上の問題を理由にした休・退学は、つねに23%以上で上位を占めた。また、この調査で報告された平成17年度1年間の自殺既遂

学生46名のうち、存命中に保健管理センターが関与していた事例はわずか5名(10.9%)であった。保健管理センターでは、自殺願望や自殺企図を繰り返す学生の多くに精神科医や臨床心理士が援助を行い、自殺防止の実績をあげている²⁾。それだけに、この関与率の低さは憂慮すべきことである。既遂学生の多くはなぜ保健管理センターの精神科医や臨床心理士に援助を求めなかったのだろうか。さらに、大学生の精神保健サービスに対するニーズを調査した山村他³⁾によれば、調査対象

1) 広島大学大学院教育学研究科

1) Graduate School of Education, Hiroshima University

となった全学生のおよそ1%程度の学生が保健管理センターをメンタルヘルス上の問題を解決するために活用しているが、彼らの推計によると臨床的関与の対象となるレベルのメンタルヘルス上の問題を有する学生の割合は、およそ20%程度であり、保健管理センターの利用者の割合を大きく上回る。多くの大学では、大学入学時のオリエンテーションにおいて心理カウンセラー（心理療法家を含む。以下、カウンセラーと略す。）が相談室の活動について説明し、心理カウンセリング（心理療法を含む。以下、カウンセリングと略す。）の場面のロールプレイを提示し、ポスターやホームページでの紹介をするなど学生への働きかけが行われている⁴⁾。それだけに、学生の保健管理センターのカウンセリング活用率の低さは憂慮すべきことである。

このように、学内のメンタルヘルスの専門家の援助が必要であり、しかも有益であると考えられる事例は多くあっても、積極的に援助を求める行動、すなわち援助要請行動を起こす学生の割合は低いという実態が多くの大学である。欧米では、悩みを抱えながらカウンセラーに援助を求めないという現象をサービスギャップと呼んでいる。そして、サービスギャップを埋めるために、援助要請行動の規定要因に関する研究が多く実施されている。例えば、カウンセリングに対する意識や態度が、カウンセラーへの援助要請行動の規定因となることが明らかにされている⁵⁾。わが国においても援助要請行動に関する研究は近年注目が集まりだしたが、援助要請行動に関連する要因を測定する尺度はいまだ整備されていない。

援助要請行動は、主に社会心理学における援助要請行動研究の中で検討されてきた概念であるが、社会心理学にとどまらず、教育心理学、臨床心理学など幅広い分野において発展してきた⁶⁾。ただ、援助要請行動の定義は分野や研究者によって異なっている。例えば、社会心理学では、DePaulo⁷⁾が、援助要請行動を「個人が問題の解決の必要性のために他者に対して直接的に援助を求める行動である」と定義したが、臨床心理学においては、Srebnik, et al.⁸⁾が、援助要請行動を「メ

ンタルヘルスまたは他の公的私的サービスに対して情緒的、行動的問題の解決のために援助を求めることである」と定義し、援助者をメンタルヘルスの専門家に限定し、援助内容も情緒的、行動的問題を中心的に扱った。また、教育心理学においては、水野・石隈⁶⁾が「個人が情動的・行動的問題および現実生活における中心的問題で、カウンセリングやメンタルサービスの専門家、教師などの職業的な援助者、及び友人・家族などのインフォーマルな援助者に援助を求めるかどうかについての認知的枠組み」として被援助志向性 (help-seeking preference) という概念を提唱し、援助者をメンタルヘルスの専門家に限定することなく、援助内容も幅広く扱っている。

カウンセラーへの援助要請行動に関するこれまでの研究では、カウンセラーへの援助要請を測定するため、様々な方法が取られてきた。まず、過去にカウンセラーに援助を求めたことがあるかどうかを訊ねる方法がある⁹⁾。しかし、この方法では、今後の援助要請の可能性を測定できない。また、「今後どの程度カウンセラーに援助を求めたいと思うか」の単一項目に対して、段階評定させる方法がある¹⁰⁾。しかし、この方法では情緒的問題、学業に関する問題などの相談領域別の援助要請意図を測定出来ない。そこで、情緒的問題、行動的問題、対人的問題、学業に関する問題などの相談領域別に、カウンセラーへの援助要請意図を段階評定させる方法がある。例えば、Cash, et al.¹¹⁾が作成した The Intention of Seeking Counseling Inventory (以下、ISCI) が代表的で、欧米の研究で最もよく使われている。しかし、ISCIの妥当性は内容的妥当性のみが検討されており、十分な妥当性が確認されたとはいえない。また、木村・水野¹²⁾が「対人・社会面」、「心理・健康面」、「就学・進路面」の問題領域を設定し、それぞれの問題領域から2つずつ合計6つの悩みをとりあげ、援助要請意図を尋ねている。しかし、この援助要請意図尺度は、複数の問題領域別に援助要請意図を測定しているものの、例えば、対人・社会面の問題領域の悩みであれば、「対人関係」や「恋愛・異性」のように質問項目で記載されている悩みが

漠然としているため、調査対象者が悩みを想定しづらい面がある。この他に、仮想の臨床事例を提示し、「もしもこのような問題を抱えていたらカウンセラーに援助を求めるか」を段階評定させる方法がある¹³⁾。この方法は、具体的な悩みを想定して援助要請意図を回答できるという利点がある。Hinson and Swanson¹³⁾のように鬱状態など特定の問題に対する援助要請意図に限定する場合に効果的な方法だと考えられる。しかし、情緒的問題、学業に関する問題などの相談領域別の援助要請意図を測定するとなると、相談領域別に刺激文を提示してカウンセラーへの援助要請意図を評定してもらわなければならないため、調査対象者に与える負担が大きくなる。

そこで、以上のような先行研究の問題点を踏まえて、Cash et al.¹¹⁾のISCIを参考に、悩みの内容を具体的に提示した「大学生用援助要請意図尺度（以下、大学生用ISCI）」を作成し、その信頼性と妥当性を検討することを本研究の目的とする。なお、本研究では、援助要請行動を「個人が、心理的問題で、心理カウンセラーに心理的援助（心理カウンセリングや心理療法を含む。以下、カウンセリングと略す。）を求める行動」と定義する。なお、この定義に従って、「個人がカウンセラーに心理的援助を求める意図」を援助要請意図と呼び、援助内容を心理的問題に限定し、援助者をカウンセラーに限定する。

II. 方法

調査対象者 調査対象者は、大学生278名（男性142名、女性136名）だった。なお、回答に欠損値のあった者（男性9名、女性6名）を除く263名（男性133名、女性130名）を分析対象とした。対象者の平均年齢は20.92（ $SD=.86$ ）であった。

調査手続き 2007年10月、無記名自記式質問紙を講義の時間内に実施し、その場で回収した。

質問紙の構成 ①大学生用TAPS Deane & Chamberlain⁵⁾のTAPSを、海外留学経験者を含む臨床学系大学院生3名と教員により順翻訳し、バイリンガルによる逆翻訳を行なった。質問項目は18項目あり、各項目について、「全くそう思わ

ない（1点）」～「非常にそう思う（5点）」の5段階で評定を求めた。合計得点の範囲は18点から90点であり、得点が高いほど、カウンセラーに援助を求めることに対する不安が高いことを示す。

②大学生用ISCI Cash et al.¹¹⁾が作成したISCIを参考に、大学生がよく抱く悩みを具体的に挙げ、あなたがもしそのような問題状況に遭遇し、自分で問題を解決しようとしてもできないとき、カウンセラーに相談するかどうか尋ねた。質問項目は21項目あり、各項目について「全く相談しないと思う（1点）」～「非常に相談すると思う（6点）」の6段階で評定を求めた。合計得点の範囲は21点から126点であり、得点が高いほど、カウンセラーに援助を求める意図が高いことを示す。③**仮想の臨床事例における援助要請意図の程度** 日本の大学生によく見られる問題領域（心理・対人関係、物質依存、学業）の事例を6つ提示し、各事例における援助要請意図の程度を「全くそう思わない（1点）」～「全くそう思う（7点）」の7段階で尋ねた（Table 1）。提示した臨床事例は、ISCIの因子分析（主因子法・直接オプティム回転）から抽出された下位尺度（Cepeda-Benito & Short¹⁴⁾）を参考に作成した。合計得点の範囲は6点から42点であり、得点が高いほど、仮想の臨床事例におけるカウンセラーへの援助要請意図が高いことを示す。

④**基本的属性** 調査対象者の属性として、性別、年齢を尋ねた。

III. 結果

探索的因子分析 大学生用ISCIのうち、フロア効果が認められた7項目のうち重要な項目と考えられた3項目を除いて、項目を削除し、17項目に対して探索的因子分析（最尤法、Promax回転）を行なった。その結果、固有値の落差と因子の解釈可能性から3因子が妥当であると判断した。そこで、3因子を想定して因子分析した結果、最終的に、17項目3因子構造を得た（Table 2）。各因子については、ISCIに従って解釈し、第1因子は「友達との付き合いで困っているとき、私は、」などで因子負荷量が高く、「心理・対人関係の悩

Table 1 問題領域別の仮定の臨床事例

I	心理・対人関係①	父親がギャンブル好きで、負けがこむと消費者金融から借金をする。そのため、父親と母親の間でけんかがたえず、母親が毎晩のように泣きながら電話してくる。こうしたことは昔から何度もあったが、授業、サークル、就職活動で疲れた身には、母親の愚痴を聞いてあげる余裕がなく、母親に冷たい態度をとることが多い。そんな自分が情けなくて、落ち込んでいる。
II	心理・対人関係の悩み②	同じ学科(コース)の同級生のA男(A子)と1年ほどつきあってきたが、折り合いが悪くなりひと月前に別れた。その間、親友のB子(B男)にA男(A子)との関係について度々相談に乗ってもらっていた。そのB子(B男)がA男(A子)とつきあっているらしいという話を最近ひとつづつに聞いて、ショックを受けた。人間不信になって、授業にも出られなくなった。
III	学業の悩み①	3年生になり、卒論のための研究室配属が決まった。当初希望していた研究室は学生の評判がよく、競争率が高く、成績が芳しくなかったこともあり、結局第3志望の研究室に回された。そこでは、指導教員の専門とする研究テーマで卒論を書くことになっている。しかし、そのテーマにはまったく興味が持てない。チューター教員に、研究室の変更を申し入れたが、もう決まったことだからと受け付けてもらえなかった。これでは、留年するか、退学するしかないとい追いつめられた気持ちになっている。
IV	学業の悩み②	教師になるつもりで教育学部に入ったが、講義や実習を通して自分は教師に向いていないと思い始めている。一方、サークルでやっている演劇にはまって、将来はプロの役者をめざしたいと思っている。そのため、卒業後は東京の劇団の研究生になろうと思う。そのことを教師をしている両親に話したら、猛烈に反対をされ、勘当だ、もう送りもしないといわれて困っている。
V	物質依存の悩み①	研究室やバイト先で人間関係がうまくいかないことが多く、毎晩アパートでビールを飲む習慣が身につけてしまった。ついつい酩酊するまで飲んで寝てしまい、宿題もできず、毎朝自責の念にかられる。このままだとアルコール依存症になるのでなんとかしたいが、自分の意志の弱さを暴露するのははずかしくて、友人にも相談できない。ひとりで悶々として酒量が増える。
VI	物質依存の悩み②	大学に入ってからすぐにタバコをはじめ、気がついたら日に1箱のヘビースモーカーになっていた。タバコは何よりも気持ちを落ち着かせてくれる。ところが、卒業後に就職を希望している会社の募集要項を見たとこ、「全社禁煙運動展開中」と明記してあった。すぐにでも禁煙しなければならぬが、これまで何度も禁煙を試みたが失敗に終わっているだけに、どうしたものかと頭を抱えている。

み」因子(10項目)と命名した。第2因子は「テスト前に不安が強くなって困っているとき、私は、」などで因子負荷量が高く、「学業に関する悩み」因子(4項目)と命名した。第3因子は「タバコがやめられなくて困っているとき、私は、」などで因子負荷量が高く、「健康の悩み」因子(3項目)と命名した。各因子の項目の得点を合算して項目数で割り、下位尺度得点の評定平均値とした(Table 3)。

尺度の信頼性 次に、大学生用 ISCI の内的整合性を検討するために、Cronbach の α 係数を算出したところ、尺度全体の α 係数が .89、第1因子の α 係数が .92、第2因子の α 係数が .84、第3因子の α 係数が .78で、因子間でばらつきはあるが、比較的高い信頼性が得られた。

確認的因子分析 「心理・対人関係の悩み」因子、「学業に関する悩み」因子、「健康の悩み」因子の3因子を外生的潜在変数、それらの影響を受ける17項目を内生的観測変数とする確認的因子分析を行い、各構成概念のデータへの適合度を検討した。具体的には、適合度指標 (Goodness of Fit Index, GFI)、修正適合度指標 (Adjusted Goodness of Fit Index, AGFI)、比較適合度指標 (Comparative of Fit Index, CFI)、及び平均二乗誤差平方根 (Root Mean Square Error of Approximation, RMSEA) を求め、3因子17項目から成るモデルの適合度を評価した。その結果、モデルの適合度は、GFI = .884、AGFI = .843、CFI = .931、RMSEA = .077と観測されたデータとある程度高い一致を示し、3因子、17項目から成る大学生用 ISCI の因子妥当性が確認された。

Table 2 大学生用援助要請意図尺度（大学生用 ISCI）の因子分析（最尤法，Promax 回転）の結果

項目	I	II	III
【心理・対人関係の悩み】			
3) 友達との付き合いで困っているとき、私は、	.89	-.01	-.07
14) 友だちができなくて困っているとき、私は、	.80	-.12	.10
5) 気分が落ち込んで悩んでいるとき、私は、	.79	-.04	-.06
6) 両親との喧嘩や言い争いがたえないとき、私は、	.75	-.05	.02
15) 孤独を感じる時、私は、	.74	.01	.00
21) 先輩や後輩との付き合いで困っているとき、私は、	.63	.29	-.04
12) 自分の能力や外見などで劣等感を抱いているとき、私は、	.59	.03	.12
4) 性に関する事で気になることがあるとき、私は、	.50	.16	.11
7) 人前で話すとき、あがるのではないかと心配なとき、私は、	.42	.25	.07
13) 自分のことをもっと知りたいとき、私は、	.36	.31	.03
【学業に関する悩み】			
17) テスト前に不安が強くなって困っているとき、私は、	-.16	.91	.07
9) 大学での専攻や研究室を決めるのに迷っているとき、私は、	.04	.81	-.10
16) やるべきことを先延ばしにして困っているとき、私は、	-.02	.78	.11
19) 将来の進路(就学・就職)が決まらなくて困っているとき、私は、	.33	.51	-.14
【健康の悩み】			
11) タバコがやめられなくて困っているとき、私は、	-.11	.00	.98
10) 眠れない、眠りが浅いなど睡眠のことで気になることがあるとき、私は、	.32	-.12	.53
2) お酒を止めたい、お酒を減らす方法を知りたいとき、私は、	.09	.15	.53
因子間相関			
	I	.68	.56
	II	—	.48
	III	—	—

Table 3 男女別の各変数の平均値と標準偏差

変数	男性の平均値	男性のSD	女性の平均値	女性のSD	男女の平均値	男女のSD
援助要請意図尺度得点	41.98	16.56	46.49	15.09	44.21	15.98
心理・対人関係の悩み	25.56	10.52	28.24	9.85	26.89	10.26
学業に関する悩み	9.11	4.63	9.35	4.23	9.22	4.43
健康の悩み	7.31	3.57	8.91	3.3	8.1	3.52
援助要請不安	41.39	11.28	41.72	10.96	41.56	11.1
スティグマへの懸念	26.65	8.85	25.68	8.31	25.67	8.57
強要への懸念	8.72	3.11	8.45	2.9	8.59	3.01
カウンセラーの対応への懸念	7.02	2.468	7.59	2.59	7.3	2.54
援助要請意図得点(事例)	22.41	8.67	24.63	7.14	23.51	8.01
心理・対人関係①	4.11	1.99	4.53	1.61	4.32	1.82
心理・対人関係の悩み②	3.51	1.89	3.78	1.69	3.64	1.8
学業の悩み①	3.77	1.83	4.21	1.66	3.98	1.76
学業の悩み②	3.58	1.81	3.78	1.63	3.68	1.72
物質依存の悩み①	3.9	1.86	4.59	1.53	4.24	1.74
物質依存の悩み②	3.53	2.02	3.75	1.66	3.64	1.85

基準関連妥当性の検討 大学生用 ISCI の基準関連妥当性を検討するために、仮想の臨床事例における援助要請意図得点と大学生用 ISCI 得点との関連を調べた。なお、援助要請意図得点と性別との間に有意差があったため ($t(261) = 2.31, p < .05$)、男女別の分析を行った。その結果、仮想の臨床事例における援助要請意図得点と大学生用 ISCI 得点との間に男女ともに中程度の正の相関が認められた (男性では、 $r = .465, p < .001$; 女性では、 r

$= .595, p < .001$)。以上のことから、大学生用 ISCI の基準関連妥当性が確かめられた。

構成概念妥当性の検討 大学生用 ISCI の構成概念妥当性を検討するために、大学生用 TAPS 得点と大学生用 ISCI 得点との関連を調べた。その際、大学生用 ISCI 得点の高さで、高群と低群に分け、高群と低群の TAPS 得点の平均値を男女別に比較した。その際、大学生用 ISCI 得点の上位25パーセントを高群とし、下位25パーセントを

低群とした（男性の上位25パーセントは、52点以上、下位25パーセントは、29点以下であり、女性の上位25パーセントは、64点以上、下位25パーセントは、37点以下）。その結果、男女共に大学生用 ISCI 得点の高群と低群で大学生用 TAPS 得点の平均値に有意な差は認められなかった。そこで、大学生用 ISCI 得点の高群と低群で大学生用 TAPS の下位尺度得点の平均値に差があるか検討したところ、男性においては、どの下位尺度にも有意な差は認められなかったが、女性においては、「強要への懸念」が ($t(53) = 2.36, p < .05$), 「カウンセラーの対応への懸念」が ($t(66) = 2.78, p < .01$) と高群と低群との間に有意な差が認められた。このことから、大学生用 ISCI は、女性においては構成概念妥当性を有していると言える。

IV. 考 察

本研究では、「大学生用援助要請意図尺度」の開発、及びその信頼性と妥当性について検討した。因子分析の結果、Cepeda-Benito & Short¹⁴⁾と同様の3因子構造であることが確認された。

信頼性について Cronbach の α 係数を算出した結果、「大学生用 ISCI」は、下位因子間でばらつきはあるが比較的高い信頼性が確認された。本研究において内的整合性の最も低い因子で $\alpha = .78$ という結果が得られていることから信頼性のある尺度が作成できたと考えられる。さらに信頼性を正確に測定するに、再検査信頼性についても検討する必要があると考えられる。

妥当性について 確認的因子分析を行った結果、3因子から構成される「大学生用 ISCI」の因子的妥当性が確認された。また、仮想の臨床事例における援助要請意図得点と大学生用 ISCI 得点との間に、男女とも予想通りの中程度の相関が見られ、基準関連妥当性が確認された。また、大学生用 ISCI 得点高群と低群の大学生用 TAPS 得点を比較した結果、女性のみ「強要への懸念」と「カウンセラーの対応への懸念」に予想通りの有意な差が見られ、女性のみ構成概念妥当性が一部確認された。では、男性ではなぜ構成概念妥当性が認められなかったのだろうか。男性では、援助要請

意図の高群は、低群よりも大学生用 TAPS 得点の平均値が高く、大学生用 TAPS のどの下位尺度においても有意差が見られなかった。また、男性では、援助要請意図尺度得点は正規分布を示すことはなく、低得点の方向に偏っていた。本研究の結果を Cepeda-Benito & Short¹⁴⁾の結果と比較すると、標準偏差の値は男女共にほぼ同じ値だが、男性の援助要請意図得点の平均はやや低く、こうしたことから本研究の調査対象となった男性群が少なかったため偏った結果を示したと考えられる。今後は男性の対象者の数を増やすことで分布の偏りをできるだけ小さくして再検討する必要がある。あるいは、援助要請意図の性差の観点からすれば、女性のみを調査対象とした研究を行うことも有意義と考えられる。また、Cramer¹⁵⁾がカウンセラーやカウンセリングに対して否定的であっても、調査対象者のストレスが高いと、援助要請意図が高まることを指摘していることから、今後は調査時の調査対象者のストレスレベルを測定し、それを共変量として用いて援助要請意図と援助要請不安との関連を検討する必要がある。

以上のことから、本研究で作成された援助要請意図尺度は、信頼性は得られたものの妥当性に関しては不十分な点があり、尺度として使用していくためには更に検討を加える必要があることが示された。

引用文献

- 1) 内田千代子：大学における休・退学、留年学生に関する調査第28報。第29回全国大学メンタルヘルス研究会報告書 pp.86-108, 2008.
- 2) 兒玉憲一他：郊外型キャンパスにおける学生の自殺防止活動に関するコミュニティ心理学的研究。平成9・10・11年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書 pp.13-18, 2000.
- 3) 山村礎他：保健管理センターの健康管理サービスに対する学生の認知と利用及びニーズに関する調査(2)。CAMPUS HEALTH 42(1)：226, 2005.
- 4) 足立由美・安住伸子：学生相談室を利用するきっかけについて—利用者データベースと学生

- 生活実態調査結果からの分析一. 学生相談研究 28: 113-121, 2007.
- 5) Deane, F. P., & Chamberlain, K.: Treatment fearfulness and distress as predictors of professional psychological help-seeking. *British Journal of Guidance and Counseling*, 22:207-217, 1994.
- 6) 水野治久・石隈利紀: 被援助志向性, 被援助行動に関する研究の動向. 教育心理学研究 47: 530-539, 1999.
- 7) DePaulo, B. M.: Perspectives on help-seeking. In Depaulo, B. M., Nadler, A., & Fisher, J. D. (Eds.). *New Directions in Helping. Volume 2 Help-seeking*. New York: Academic Press. Pp. 3-12, 1983.
- 8) Srebnik, D., et al. : Help-seeking pathways for children and adolescents. *Journal of Emotional and Behavioral Disorders*, 4: 210-220, 1996.
- 9) Goodman, S. H. et al. : Ongoing to the counselor: Contributions of life stress and social supports to the decision to seek psychological counseling. *Journal of Counseling Psychology*, 31: 306-313, 1984.
- 10) Christensen, K. C., & Magoon, T. M.: Perceived hierarchy of help-giving sources for two categories of student problems. *Journal of Counseling Psychology*, 21: 311-314, 1974.
- 11) Cash, T. F., et al.: When counselor are heard but not seen: Initial impact of physical attractiveness. *Journal of Counseling Psychology*, 22: 273-279, 1975.
- 12) 木村真人・水野治久: 大学生の被援助志向性と心理的変数との関連について—学生相談・友達・家族に焦点をあてて—. *カウンセリング研究* 37: 260-269, 2004.
- 13) Hinson, A. J., & Swanson, L. J.: Willingness to seek help as a function of self-disclosure and problem severity. *Journal of Counseling and Development*, 71: 465-470, 1993.
- 14) Cepeda-Benito, A., & Short, P.: Self-concealment, avoidance of psychological services, and perceived likelihood of seeking professional help. *Journal of Counseling Psychology*, 45: 58-64, 1998.
- 15) Cramer, K. M.: Psychological antecedents to help-seeking behavior: a reanalysis using path modeling structures. *Journal of Counseling Psychology*, 46: 381-387, 1999.